

# 自由席

近世・近代の日本美術史と出版文化史を研究するフランス国立東洋言語文化大学教授のクリストフ・マルケさん（51）＝写真＝は、江戸時代の東海道、大津宿周辺で描かれた庶民絵画を紹介した「大津絵」（角川ソフィア文庫）を出版した。

「江戸時代の18世紀半ばまでは、大津絵は浮世絵と肩を並べるほど人気を博し、庶民の生活に浸透していました」。それが、昭和期以降、次第に忘れられ、アカデミックな研究の対象とは見なされなくなった。「でも、大津絵抜きには、江戸の美術は語れないと思う」という。

街道筋で土産物として売られた大津絵は、神仏や、鬼、人物、鳥獣が主に描かれ、簡略化された線で、親近感のあるキャラクターを描いた。人間のおごりや愚かさに対する風刺が込めら



## 江戸期の民画「大津絵」に光

れたこの民画は、「江戸の庶民文化が生んだ『ゆるキャラ』」であり、「街のない無造作な美」が輝いているという。「幕末明治の画家、河鍋暁斎や小林清親は、大津絵のキャラクターを描いているし、洋画の巨匠、梅原龍三郎は大津絵を愛し、『マチスも大津絵には及ばない』という趣旨の言葉を残しています」

全国各地に残る大津絵の作品調査を続け、7月に東京で開いた大津絵に関する初めての国際シンポジウムの成果を雑誌にまとめる予定もある。

フランスの学術・文化を日本に紹介するフランス外務省の機関、日仏会館フランス事務所の所長に赴任して5年。8月末でその任期を終え、母国に戻った。多彩な学術ジャンルの講演会やシンポジウムを企画する傍ら、暁斎や葛飾北斎、鍬形蕙斎といった絵師や江戸の出版文化の研究を続けてきた。

「でも今は、大津絵が一番面白い。この魅力をフランス人にも伝えていきたい」。帰国後は日本美術史を教えながら、その研究に打ち込む心つもりだ。（国）